

木曾教育百号の発行に寄せて

木曾教育会長 宮坂 寛

会誌「木曾教育」は昭和二十五年に創刊されて以来七十五年を数え、今回で創刊百号を迎えました。当時の教育会長の川口五男人先生は創刊の辞で、「(木曾教育は)五百名を数えた会員の寄稿と、教育会に深いつながりをもつ方々の、玉稿を編集したものであり、互いが相互交流し、切磋親和することが使命とするもの」と記され、また松原常雄先生は編集後記で、「活字を通して同僚を先輩を人間を発見し合うこともこの紙の使命である。高い遠い所を仰望すると共に、近い足下に人間を発見して行き度い」と記されています。近年の少子化や学校の統廃合から創刊当時と比べて会員数は約半数ほどに減少しましたが、相互の「切磋親和する」、また「仰望すると共に、近い足下に人間を発見する」使命を忘れず、教育会総集会の講演や夏期大学のまとめ、会員から寄せられた研究や教育実践、若い先生方からの紀行文等、会員相互の実践、切磋琢磨できる交流の場となる会誌として、これからも大切にしていきたいと思えます。

今回は創刊百号を記念し、戦後間もない昭和二十三年より続き今年で第七十六回となった木曾夏期大学にお迎えしてきた各界の著名な先生方から、講義後に私達へ残してくださった色紙を特集しています。また一昨年に急逝された二十七回も講義いただいた故竹内整一先生の愛弟子で、今年度より文芸の講義をしてくださっている日本女子大学国際文化学部准教授の伊藤由希子先生から、竹内先生の夏期大学の思い出について寄稿いただいていますので、ご一読ください。

さて、昨年度の代議員会で木曾教育会館の今後について心配する意見が出されました。木曾教育会館は一九三六年の木曾教育会創立五十周年の翌年に完成し、今年で八十八年を数えます。令和三年八月の木曾川の増水では和室が床下浸水し、代議員の先生方に手伝わっていたき簡易的な土囊を設置しました。また今後起こると予想されている大規模地震に対して耐震構造は充分でなく、補強工事を行うには多大な経費が必要なことから、諸先輩方からも今後の教育会館のあり方について心配する声をいただきました。

教育会館には図書館機能、博物館機能、会議機能、事務局機能の四つの機能があると言われていますが、その全てを満たす解決策を見つけるには前述の課題を解決する必要があります。教育会理事會や校長會等でも検討を重ね、会員の先生方には代議員を通して、また諸先輩方には文書で今後の方向性の原案をお示ししましたが、相談をさせていただいた木曾町から示された候補の中から最適と考えた旧帝室林野局木曾支局庁舎の「御料館」へ、会議機能と事務局機能の二つを移していくことをまず進めたいと考えています。また同時に、図書館機能と博物館機能のあり方についても、会員や諸先輩方と共に検討を重ね、より良い方向性を探りたいと考えていますので、宜しく願います。

最後に、地域の未来を担い地域の文化を受け継ぐ木曾の子どもたちに、確かな学力と心豊かな人となるよう、広く仲間とともに資質向上を図り、相互に高め合える木曾教育会をこれからも目指していきたいと思えますので、どうぞ宜しく願います。

木曾教育

第100号

